

# ミステリ読書案内

2024. 5. 2 発行元

第571号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

## 阿津川辰海「黄土館の殺人」

2月に講談社タイガから阿津川辰海の『黄土館の殺人』が出た。『紅蓮館』『蒼海館』に続く第三弾である。毎回仕掛けたっぷりの「謎解き」を楽しませてくれる作品なので大いに期待が膨らむというものだ。

### 「紅蓮館」「蒼海館」を受けて…

『黄土館の殺人』は前々作の『紅蓮館の殺人』そして前作の『蒼海館の殺人』との結びつきが強い内容だ。探偵役が共通しているだけでなく、関係者にも繋がりがある。探偵役の葛城輝義たちは前作の時点では高校三年生だったが、本作では大学生の二十歳になっている。

『紅蓮館』の時は火事、『蒼海館』の時は水害。今回は地震による土砂崩れで、唯一の道が鎖されて孤立した屋敷が舞台になる。「クローズドサークルもの」である。

### 「三部構成」が特徴

メインとなる「黄土館」の事件は第二章になる。そこに行く前に第一章があり、地震で鎖された館の外での動きが展開されることになる。崖崩れによって、ワトソン役の田所と三谷が館側に、探偵役の葛城は外側に取り残され、分断が生じるからである。そして、この外での出来事が

結末の第三章になって大きな意味を示すことになる。

『紅蓮館』の中心人物だった高名な推理小説家・宝田雄山の友人だという土塔雷蔵の屋敷が「黄土館」。彼は東洋のミケランジェロと呼ばれた芸術家で、特異な形をした屋敷を作り上げた。そこには雷蔵の四人の子どもたちが集まってきており、葛城たちもそこに招かれたような経緯だった。館には以前出会ったことのある人物もいて…。

### 複雑な「館」のつくり…

内扉の前に館の見取り図が載っている。いかにも「本格もの」らしい作りで、この図の中に多くの手掛かりが隠されている。館の四隅に塔が立っていてこれが重要な現場になっていく。塔、銅像、離れ…全てが事件に中に取り込まれていて、その意味では盛りだくさんな要素が詰まっている。

不可能犯罪。連続殺人が起きていくのだが、そのどれにも不可能な

### 阿津川辰海・作品リスト

1. 名探偵は嘘をつかない
2. 星詠師の記憶
3. 紅蓮館の殺人
4. 透明人間は密室に潜む
5. 蒼海館の殺人
6. 入れ子細工の夜
7. 録音された誘拐
8. 午後のチャイムが鳴るまでは
9. 黄土館の殺人

点が含まれている。雨上がりで足跡が残るはずなのに、中庭の真ん中に…。全員にアリバイがある時間帯にナイフで刺されて…。十メートル以上の空中からライフルで撃たれた…。阿津川らしき全開の謎だらけの展開が続いていく。

### 600ページの超力作

今回も600ページに及ぶ力作である。構成が複雑であり、いろんなところに伏線らしきものが感じられ、読むスピードが上がらない。思いの外時間がかかった。探偵・葛城がストーリーの中心でないことも関係しているかもしれない。

「あとがき」を見るとこのシリーズは「四部作」になるようなことが書いてあるので、本書の後にもう一冊が出るらしい。来年ぐらいになるのだろうか。期待したい。

## 北村薫「中野のお父さんと五つの謎」

2月に文藝春秋から出た本。『中野のお父さんシリーズ』の四冊目になる。『中野のお父さん』『中野のお父さんは謎を解くか』『中野のお父さんの快刀乱麻』の続編。『オール讀物』に掲載した五編を集めた短編集。犯罪関連の話題はほとんどなく、「文学の謎」を追い求める「文学探偵」もの。中野のお父さんは古書収集家で、近代文学の隅々の知識を持っている。娘の田川美希は雑誌『小説文庫』の編集部に属していて、関係者から難問を預けられる形になる。

第一話『漱石と月』。漱石が「I love you」を翻訳する時に、「こういう言い方は日本にはない」と言って「月が綺麗ですね」と訳したという問題。実際にそういう出来事があったのか、はたまた後で作られた都市伝説なのかを証明しようという話。落語の話や当時の流行歌の話も加えながらさまざまな文献を辿っていく。「漱石関り」となると本当にたくさんの資料があるものだ。当時の周囲にいた人達を書き残した文や以降の研究者の分析やら…。第二話『清張と手おくれ』は『点と線』をテーマにしたもの。前にも書いたけれども、北村薫の感覚は私に通じるものがある。ただ、こうして連載を続けてくると初期作品のような鋭い感覚は次第に薄れてくるように思う。取り上げる文学テーマそのものが今一ピンとこないものになっていく気が…。いずれ、地方に住んでいる貧乏な読者にとっては、資料調べは不可能に近く、復刻版にしても手の届かないものばかりである。雑誌の編集者も広範な知識が要求され、不断の努力が欠かせないものだなあと思ってしまう。